

## 片山洋子作 「酔いしれて」

効果音 (教室のガヤ)「オス！」「おはよう」

黒田俊子 おはよ！

中村久美 何よ、俊子ったら、おばあさんみたい。背中丸めちゃってさ。

俊子 (寒そうに)おはよ、久美。だって寒いんだもん。カイロ 1 個じゃ足りないぐらいだよ。

久美 カイロ?! ヤだ俊子、またそんなのおなかに入れてんの？ イヤあねえ。今からそんなんじゃさ、冬休みにスキーに行くのにどうすんのよ。もうじき雪だらけになんのよ。

ナレーション 黒田俊子と中村久美は、青春高校の 3 年生。同じクラスで、共に美術部に籍を置く親友同士。二人はもう就職先は決まっていたので、学生生活最後の冬休みを楽しんでくる計画でした。俊子にとっては、このスキー旅行にはもう一つの目的がありました。彼女は最近、中学生時代から交際していた男友達と、いろいろな行き違いから別れたのです。この旅行は、その痛手を少しでも忘れるためでもあったのです。

音楽 (英語男声ボーカル)

仲村徹 いやあ、久美ちゃんはスキー上手だよ。なんたってあの直滑降で滑ってこられたら、だれだって恐れをなしてよけちゃうよな。

大学生男子 ほんとな。“怖いもの知らず”って感じの滑り方だね。

女子高生 3 日間でクリスチャニアまでやれれば大したものよ。

徹 ほらほら、そんなに硬くならないで。今晚は打ち上げパーティーなんだから。みんなで飲もうぜ。

俊子 あ、でもわたしたち、まだ…。

男子 大丈夫だよ。ここには先生なんていないしさ。おれたち大学生だって一緒なんだから、保護者同伴ってことさ。

久美 はい、じゃ頂きまーす！ ああおいしい。これ、辛口だ。

徹 ああ、俊子ちゃんも、飲んだことないわけないだろ。はい。

俊子 はい、じゃ、やっちゃおうかな。あ、少しね。

ナレーション 俊子たちにとって、大学生たちとの交流は新鮮で、少し大人の世界をかいま見たような気持ちにさせるのでした。そして、酒盛りがどんどんにぎやかになっていくと…

女子高生 あら、ほんとオ？ 俊ちゃんも彼がいるのオ？ いいわねえ。どこの人？

俊子 え？ いませんよ、そんな人。

徹 久美ちゃんが言ってたぞ。中学校の時から付き合ってるんだって？

俊子 知らない知らない。そんな話いいからさ。お兄さん、お酒もう一本！

大学生 よお、大胆な発言、さすが美術部！

俊子 そ、芸術には大胆さと個性がなくっちゃね。“芸術は爆発だ！”な一んちゃって。へへへ。

久美 ちょっと、俊子、大丈夫？ 飲みすぎじゃないの？

女子高生 じゃ気分転換に、ゲレンデのほうに梯子<sup>はしご</sup>しましょうよ。

俊子 賛成！ 梯子大好き。登る時のあのスリル。シャガールも描いた、あの「ヤコブの梯子」よ！

久美 ダメだ、こりゃ。(間)どうしたの、俊子、急に静かになっちゃって。あ、顔色悪いよ、すごく。

俊子 うん、ちょと… 気持ち悪い。わたし、外の空気吸ってくるから。

久美 そう。じゃわたしも行ってあげるから。

俊子 あ、いい。独りで。独りになりたいの。

ナレーション 俊子は、独りで外に飛び出すなり、吐いてしまいました。心臓は早鐘のように打ち、頭の中がグルグル回り、彼女はその場に、雪の中にうずくまってしまいました。どのくらいたったのでしょうか。ふと我に返った彼女は、立ち上がってゲレンデへと降りていきました。

俊子モノローグ ああ、冷たい。空気が、凍った雪の上を滑っていくみたい。きれいな色。夜空も、青い雪山も。わたし、どうしてこんな風になっちゃったのかなあ。どうしてあんなにお酒飲んじやったのかな。だれ…？

柴田聖 あれ、黒田さん？ 黒田俊子さんじゃないか？

俊子 あ、柴田さん…。どうして？ どうしてこんなところに？ そういえばお酒の席では見かけなかったけど。

聖 うん。僕はああいう席って好きじゃないんだ。なんかこう楽しんでるみたいに見えても、実は心の中で風が吹いてるって言うのかな。ごまかしてるっていうか。そうは思わない？

俊子 そうですね。耳が痛いけど。お酒って、飲むと始めはなんだかポーッとして気持ちよくなるけど、だんだん悲しいことやイヤなことが頭の中を占領して、切ない気分になっちゃうんですね。

聖 ふーん。なんだか“経験者は語る”って感じだね。

俊子 そう。今のわたし、たまらない気分。お酒に酔えばルンルン気分でいられるって思ったのに、飲めば飲むほどたまらない。

聖 どうして？ どうしてそんなにたまらないの？ 何か悩みでもあるのかな。

俊子 うん…。(思い切って)柴田さん。聞いてくれますか？ わたし、今なら人に話せそう。

聖 いいよ。僕でよかったら。

音楽  
俊子

(BGM)

わたしね、中学の時から交際してた人がいたの。その人は、本当にいい人なの。高校は違っちゃったんだけど、お互いの心の中は一番よく知り合ってると思ってた。だけどね、わたしがいけなかったんだけど、あることでわたし、彼が理解できなかったの。ううん、理解しなくなかったのかな。彼の言ったことがわたしの思うとおりじゃなかったから。それから、なんていうかいろいろあって、12月に別れたの。でもわたし、でもわたし…。彼のことを思うとたまらなくなって泣けちゃうんですね。歩いていても何していても…。おかしいって思うでしょう？裏切っておいて、その人のために泣くなんて。でも泣けちゃうの。「今ごろどうしてるかな」って思うと。だって長い間、わたしたち、二人でいろんなこと解決してきたし、思い出もあるし、「将来はこの人と結婚するんだ」と決めてたのに。一番大切にしたいと思ってたのに。その人を愛せないもう一人の自分がいるの。愛してるつもりなのに、自分の都合のいいようにしか愛せない。イヤな自分がここにいるのよ！（泣き崩れる）

聖

そうか。でもよく打ち明けてくれたね。今、黒田さん、少しオーバーかもしれないけど、人間の抱える苦しみの中で、一番大切な、本質的な問題にぶち当たっているんだな。そう、“愛”の問題だよ。黒田さん、本当に人を愛したら、だれでも必ずこの問題にぶつかるんだ。それはだれも完全じゃないからさ。むしろ、人間同士に本当の愛なんてあるのかどうか。僕は疑問だな。

俊子

なぜ？ あるわよ。本当の愛はどっかにきつと。でなきゃ、寂しすぎるわ。

聖

そう、確かに本当の愛はあるよ。だけどね、それは人間の中にじゃない。

俊子

え？

聖

自分がかわいい。相手を自分の思いどおりにしたいっていう自己中心の思いを超えた本当の愛は、神様の中にだけある。神様は、ご自分のただ一人子であるイエス様をさえ、僕たちに与えてくださった。イエス様はね、僕みたいな、エゴイズムの塊みたいな男のために、十字架の上で命を捨ててくださった。聖書はね、「ここに愛がある」って言うんだ。

俊子

初めて聞きました、そんなお話。でも、もしそれが本当なら…。

聖

本当だとも。僕は信じてる。こういう僕自身が、そう、黒田さんと同じような悩みにぶち当たって、苦しんだんだ。「一思いに死んだほうがましだ」って薬まで買い込んでね。だけど、「どうせ死ぬなら最後にもう一度」って思って、中学時代に読んでた聖書を読んでみた。そしたら、今思うと神様の不思議な計らいだったんだな。自分の心の中の醜さが見えてきた。「愛したいけど愛せない」って悩んでるつもりが、結局は自分を甘やかし、自己憐憫<sup>れんぴん</sup>に陥ってる。あるのは自分かわいさで、相手の立場に立って、相手を本当に愛そうなんて気持ちはこれっぽちもない。小さい時から何度も聞いてたけど、「これが“罪”か」って分かった

ら、もうなりふり構わず「神様、助けて！」って言うしかなかった。黒田さんの心  
の問題も、あるいはそんなところにあるんじゃないのかな。

ナレーション 俊子はその夜、心の中で、いつまでも寝付かれませんでした。そして次の日――。

音楽 (BGM)

聖 やあ、黒田さん、おはよう。どうかね、気分は？

俊子 はい。昨夜はありがとうございました。

聖 いやあ、「ちょっと厳しいこと言っちゃったかな」って、気にしてたんだけどさ。

俊子 いいえ、そんなことないです。自分を見つめるいい機会になったし、それに…。

聖 それに？

俊子 自分ってなんなのか、なんのために生きてるのか、考えてたら、柴田さんの信  
じてる神様のこと、もっと聞きたくなって。

聖 ほんと？ そうか、よかった。だけど、それじゃ黒田さんのかわいい酔っ払いち  
ゃんはもう見られないかな？

俊子 柴田さん！ からかわないでください。

聖 ごめんごめん。その友達にも、帰ったら素直に自分の気持ちをもう一度伝える  
といいね。ほかの連中はさ、昨夜すっかり酔いしれちゃって、まだベッドの中だ  
よ。黒田さん、さあ、もう一滑りしようか。

俊子 ええ、コーチお願いします！

ナレーション 俊子は、柴田のあとに続いて、輝く新雪の中に飛び出しました。朝日に輝く雪  
の白さが、胸一杯に吸い込む新鮮な空気の中で、俊子の心の中にまで染み  
渡るようでした――。

音楽 (高まって)

聖書の言葉 (ヨハネの手紙第一 4:10) 私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、  
私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに  
愛があるのです。

<完>